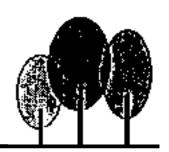
# 千葉市図書館情報ネットワーク協議会

# Network 通信



No. 25

# 平成18年度第3回研修会報告



《千葉市美術館講堂》

平成19年2月8日(木曜日)、千葉市美術館11階講堂を会場に、 本年度の第3回研修会を開催しました。

日程・内容は下記のとおりで、31名の参加を得ました。

事例発表後、10階美術図書室に案内していただいて見学をし、 7階で開催中の「竹久夢二展」のギャラリートークを実施していた だきました。

その後は、「竹久夢二展」や同じ7階のミュージアムショップ、 8階で開催中の「鈴木鷲湖 幕末に活躍した郷土の画家」展や、1階のさや堂ホールなどを自由に見学しました。

#### 〇 事例発表

#### 午後2時00分~3時00分

- · 発表者 西山 純子 氏 (千葉市美術館学芸員)
- ・テーマ 「資料の収集と保存」について
- 「竹久夢二展」見学 午後3時20分~
  - ・ギャラリートーク (午後3時20分~4時00分) 千葉市美術館学芸員 西山 純子氏
  - 自由見学(午後4時00分~)

# 『資料の収集と保存』について

## 千葉市美術館学芸員 西山純子

千葉市美術館が所蔵する美術品は現在約7,500件を数える。絵画や版画を中心に、彫刻や版本、写真など内容は多岐に渡るが、その収集は3つの基本方針-(1)千葉市を中心とした房総ゆかりの作家・作品/(2)日本の文化を形成する近世以降の美術品/(3)現代美術-によって行われている。この基本方針は当館の立地および、平成7年に開館した比較的新しい施設として、いかに他館にはない個性をうちだすかを考慮して決められたものである。

収集の具体的な方法であるが、基本方針に適うもので、 美術館の所蔵品としてふさわしく、また収集可能な作品の



《研修会の様子》

情報を集めることから始まる。そして真贋の確認、美術史上あるいは作家の画業における重要性の判断、提示価格の妥当性の検討を経て候補作品をしぼり、市庁内の検討会および専門家を集めた収集審査会に諮って決定される。収集の決まった作品については文字情報の記録や採寸などの基本的な調査に加え、撮影を行って保存状態を把握し、時にはただちに修復の検討にはいることもある。集められた情報の数々は作品の履歴書にあたるデータベースに書き込まれ、収集後もこれに展示歴や修復歴、新たに判明した事柄などを適宜加えてゆく。

このようにして収集した貴重な美術品を、展示活動をしつつダメージの進行を極力抑えて保存してゆくことが美術館の重要な仕事であるが、ダメージの原因として注意すべきものは一般的に八種あると言われている。火災・地震・盗難・過度の乾湿・虫害・空気(大気)汚染・光・熱である。これらへの対策は、通常美術館という施設があらかじめ備えている場合も多いが(火災時のハロンガス消火・耐震建築・24時間警備・24時間空調など)、現場の地道な作業に負う部分も大きい。たとえば地震対策として、作品を収納する際にクッション材をかませたりサラシで固定するなどし[写真①]、虫害対策としては定期的な環境調査を行い[写真②]、酸化による劣化を防ぐために中性あるいは弱アルカリ性の梱包材を用いる[写真③]、といったことである。作品を展示する際にも、地震対策として不安定な立体はテグスで固定し、盗難対策として額と展示壁面とをワイヤーで



[写真①] 収蔵庫内・屏風作品の収納例



[写真②] 収蔵庫内・虫害調査用トラップ



[写真③]和紙を使用した梱包材のいろいろ





[写真④]、[写真⑤] 「竹久夢二展」書籍展示の例



[写真⑥]ブックマットによる浮世絵版画の保管例

つなぐ、あるいは展示期間や照度を制限して光や熱による 劣化を最低限に抑えるといった対策が求められる。また、 綴じのきつい古書は必要以上に開かず [写真④]、展示具 のヴァリエーションで立体的に見せる [写真⑤] といった 細かい配慮も必要である。つまりは保存と展示のどちらに も偏らない、バランスのよい心遣いと実践とが肝要という ことになる。

保存と展示のバランスを取る一例として、浮世絵版画の 保管方法を紹介する。

当館には約1,200点の浮世絵版画があるが、これらはすべて中性のコットンボードを用いたブックマットに収められている [写真⑥]。展示の際にはカバー紙を裏に回し、そのまま額に入れて行う。ブックマットへの固定には「喰先」という技術を用いるが、これは作品よりひと周り大きな和紙の内側を作品と同じ形に切り抜き、作品に枠をつけるように和紙の繊維を引き出して接着するという手法である。かくして和紙と一体化した作品を和紙ヒンジでマットに固定するわけだが、使用する糊材は中性で長期間変質せず、また乾燥した後も水に溶けるため原状復帰の可能なメチルセルロースを用いる。この技術はかなり高度なものであるが、作品の加工を最低限にし、なおかつ作品の全体を(裏打ちをしないので、時には裏面も)見せることができるという優れたものである。

作品のダメージが展示上さしつかえるほど深刻であり、または放置すると進行することが予想される場合は修復を行う。ダメージは、汚れ、破れや断裂といった単純なものから顔料の剥落、光や経年による変色、虫喰、さらにはカビ害や付着物による変質といった科学的な処置を要するものまでさまざまである。それぞれのダメージに応じて、専門家と相談しつつ修復を依頼することになる。具体的には水による洗浄、裏打ちなどによる破れや断裂の接着・補修、脱酸・漂白処理、付着物(台紙や接着剤・テープなど)の除去、補彩といった作業である。たとえば近代の版画のように、台紙を除去してプレスするだけで作品が見違えるようなケースもあり[写真⑦][写真⑧]、最低限の処置で

(作品に新たな劣化を与えることなく)いかに修復 の効果を上げるかがポイントとなる。

以上、美術品の収集と保存について若干述べてきた。収集・保存という仕事の全体を通じて最も重要なのは作品を「知る」ことである。それは作品のたどって来た歴史や現況、その性質(材質や構造)をよく知ることであり、さらにはその未来にも可能な限り創造力を働かせるということなのである。





近代版画修復の一例 [左;写真⑦]修復前、[右;写真⑧] 修復後

### 千葉市美術館図書室見学とギャラリートーク初体験を通して

### 千葉市花見川図書館 古川和子

千葉市美術館にはこれまでも何回か訪れているが、展示を見ることが目的(時にはそのあとのお茶やおしゃべりが中心)で、図書館員でありながら申し訳ないことに、図書室には足を向けたことがなかった。「ギャラリートーク」についても、「そういうものがある」とは知っていても、その時間に合わせて出かけて行くことはなかなか難しく、これまでは縁がなかった。

今回、美術館の資料保存という興味深いお話と共に、図書室見学とギャラ リートークという有意義な研修を企画してくださったことを、まず、事務 局に感謝する。

市美術館は中央区役所との複合施設で、1階さや堂ホールと6階から上の部分が美術館である。協議会加盟館である美術図書室は10階で、全12席のうち4席は眺望のよい窓際にある。資料数はあまり多くないが、コンピュータで資料整理され、入口近くに検索用パソコンもあって、どの書架にあるかがすぐわかるようになっている。





《美術図書室》

展覧会の図録等962冊が、寄贈者の名前を付した大嶋文庫としてまとめてある。また、 美術関係の雑誌は和・洋雑誌合わせて37種も所蔵しており、さすが美術館の図書室なら ではと感じられた。今度、レファレンスがあったらぜひ紹介させていただこうと思った。

さて、いよいよ「竹久夢二展ギャラリートーク」である。展示入口から始まり、各展示室を回りながら展示作品とその意図、あるいは時代背景、作品そのものの評価などの説明を聞きながら作品を鑑賞する。この展示を企画し作品を集め、ふさわしい配置と紹介方法を練り上げた西山さんご自身の口から解説を聞かせていただくことができ、とても贅沢な1時間であった。

この「竹久夢二 - 描くことは生きること - 」展は1月20日から開催されていて、私は研修会前にすでに一度訪れていた。しかし、特に竹久夢二に関心があってのことではなく、市民ギャラリーの催し物に来た折に、「夢二」の名前は知っているので、ついでにのぞいてみた程度である。今回参加した段階で私の中の「竹久夢二」といえば、『宵待草』の歌詞となよなよとした女性の絵であった。

最初のコーナーで、新聞の挿絵が出発点であり、かなり硬派な作風であることに、まず意外な感じを受けた。また、港屋という今で言えばデザイナーズショップを経営していたことも初めて知り、 意匠の斬新さはもちろん、商才も持ち合わせていた人だったのだと認識を新たにした。

画家としてのスタートから亡くなるまでを五期に分けた展示は、予備知識なしに見ていっても竹 久夢二の生き方と作風の変遷を感じられるものであった。

その上で「ギャラリートーク」に参加させていただいたおかげで、さらにいくつもの発見があった。とても全部は書きされないが、まず、最初の展示の自画像とそのわきの写真。前回来たときは「絵」を見ることに気を取られ、写真はよく観ていなかった。考えてみれば、最初に何を持ってくるかは、企画者の意図の出るところである。今度からどんな展覧会でも、最初の展示作品はもっと注意深く見よう。

西山さんの、歯切れよくユーモアを交えた解説で、京都での個展作品『邪宗渡来』『旅の唄』や最後の美人画『立田姫』の印象が、さらに強いものになった。また、3人の女性によって変わっていく夢二の美人画についても、なんとなく違うなと漠然と感じていたことを的確に説明してくださった。「日展と同じ日に個展を開催」「画学生たちが学校と称して集まる」等、文章だけであれば何気なく読み過ごしてしまうことの奥にある、夢二の自負や人となりに思いを馳せることもできた。

1枚だけ展示されていた、関東大震災直後に被災地を歩いて描いたスケッチも良かった。このスケッチを切り口にして別の展覧会も開けるのではないか、などと考えてしまった。所用があり、終了後、すぐ帰らざるを得なかったが、ギャラリートークの後、もう一度自分の目でゆっくりと見直すことができれば、印象はより深まったことだろう。

図書館に届く美術館のチラシは、出しておくとじきになくなっている。今回の研修で、同じ市内に素晴らしい施設があり、素晴らしい人材がいることを改めて感じることができた。西山さんのトークを聞きながら思いついたアイデアを、最後にあげて、今後の課題としたい。

- ・協議会加盟館等で美術館企画展とタイアップして「出張ギャラリートーク」を開く。その際、 図書館では関連資料を用意して、図書館資料の展示や貸出を行う。
- ・企画展の開催中、美術館図書室に市の図書館にある関連資料を貸し出して、美術館来館者に閲覧してもらい、併せて図書館のPR等も行う。



《ギャラリートークの様子①》



《ギャラリートークの様子②》

# お知らせ

◇ 千葉市図書館がコンピュータシステムを更新しました。

詳しくはホームページをご覧ください。

千葉市図書館ホームページ http://www.library.city.chiba.jp

Network通信 No. 25 2007年3月28日

発行:千葉市図書館情報ネットワーク協議会

事務局:千葉市中央図書館内 〒260-0045 千葉市中央区弁天3-7-7 Tel 043-287-4081 Fax 043-287-4074